掲載日:2021年10月31日, 面名:経済, 記事ID:KIJ20211031_M001800100A616002 (C)新潟日報社

荒波乗り越え

コバリキ（新潟市中央区）

■1■

時代とともに

にいがた企業ヒストリー Niigata

大陸との交易に起源

撫順炭特約店として独立

創業100余年のコバリキ（新潟市中央区）は、建築内装や外構、ポンプの設置工事など建設業を主力とする。草創期には新潟と大陸とを行き来する海上輸送で中心的な役割を担い、歴代経営者らは戦中戦後とダイナミックな発想を基に幅広い事業を手掛けてきた。時に事業撤退という厳しい決断を迫られながら、時代の荒波を乗り越えてバトンを受け継いでいる。

×　×

コバリキの前身「小林力三商店」の創業は1913（大正2）年と伝わる。創業者は現在のコバリキ社長、小林建氏(60)の曾祖父に当たる小林力三氏だ。

力三氏は、父が東京・浅草で鍼灸師として働いていた1868（明治元）年に生まれた。昔から目が見えない父は、明治維新の混乱の中で妻を亡くし、力三氏を伴って旧西蒲原郡へ帰郷。その後、新潟町（現新潟市）へ移住している。

16歳になった力三氏は、家計を支えるため新潟町の回船問屋へ見習い奉公に出る。そこで得た経験を武器に運送業界を渡り歩く。

かつて北海道・小樽と新潟、大阪を結ぶ航路で米や酒、海産物を運び、旅客も乗せた新潟運送という会社があった。力三氏は98（明治31）年に入社。その後、同社は南満州鉄道（満鉄）の子会社「大連汽船」の船舶代理店として運航業務を請け負うようになり、大豆などを輸送した。

×　×

満鉄は、日露戦争の勝利で東清鉄道などの権益を獲得した日本が、満州（現在の中国東北部）の支配機関として設立した国策会社だ。撫順の炭鉱を経営し、石炭を満州内外に輸送した。鉱山は鉄道に次ぐ満鉄の事業の柱になっていた。

「新たに撫順炭鉱の石炭を取り扱わないか」。力三氏が専務を務めていた新潟運送に、満鉄側からそんな誘いがあった。

だが、新潟運送は既に三菱系の鉱山会社と石炭を取引する間柄であり、当時の商慣習として商売がかぶるわけにはいかなかった。

力三氏は「それならば」と、独立して自ら撫順炭の特約店を開く道を選ぶ。こうして設立されたのが、小林力三商店だった。県内で撫順炭の輸入販売を行ったほか、大連汽船の代理店業務や港湾荷役なども一手に引き受けた。やがて満鉄の新潟の拠点といえる存在に育っていく。

×　×

新潟港は水深の浅さが難点だったが、1926（大正15）年に築港工事が完了し、大型船の接岸が可能になった。「さあこれから」という時、商店は大きな転機を迎える。30年、力三氏が胃がんにより63歳で急逝したのだ。

力三氏は長男と次男を病で失っており、当時23歳で肺病による療養生活を終えたばかりの三男・良介氏だけが残されていた。

いきなりトップに就くことになった良介氏は「本当にまいった。受け継がなければ食っていけなかった」と後年、新潟日報のインタビューで振り返っている。

良介氏は、父が取引先から得ていた信用を継承したいと、2代目「力三」を襲名。30人ほどの従業員とともに奮闘する。

ちょうど扱う貨物量が膨張した時期でもあった。撫順炭に加え、鋼材も輸入。32年の満州国建設で沸く現地に向け、新潟から建設資材などを船積みした。

2代目力三氏が「新潟港に毎月3回入る大連汽船の5千トン級の船腹が常に満腹だった」と語るほど荷動きが活発だった。「時代の波に乗って事業を拡大できた。憧れとともに嫉妬を感じます」。建氏は、右肩上がりで業績を伸ばした当時をうらやむ。

日米開戦後、太平洋側が敵艦の集中砲撃を受けるようになると、新潟港の重要性がさらに増していく。

自社の看板の前に立つ2代目・小林力三氏。大連汽船の代理店業務を受け継いで事業を急成長させた＝1935年ごろ、新潟市

会社データ

創業	1913年
資本金	5000万円
事業内容	建設資機材の販売、施工
売上高	約22億円（2020年9月期）
従業員数	39人（契約社員含む）